

和裁の学習に関する考察

An observation about teaching kimono-making

本 間 小 枝 子

Saeko Homma

People don't make clothes themselves at present, because they can get them very easily: so it is not necessary for them to make clothes at home.

Girls these days learn dressmaking in junior high and high schools only a little. They don't really know very much about it. So, there are not a few problems in teaching them how to make clothes (including kimono) in college.

It was found in an investigation which we made that students who have learned kimono-making are more skillful and have a better understanding of making clothes in general.

We would like to have much more time in college to teach the students dressmaking and kimono-making, but we don't.

So our task is to work out a new method, which can get better results, in the limited time they have in college.

I 緒言

現代は衣料産業の技術革新により、市販衣料も色、柄、型、サイズともに豊富になり、既製衣服に頼る時代となってきて、家庭における裁縫の必要度は少なくなっている。また中・高校における被服製作の学習内容も最小限におさえられているので、大学における和裁の学習上いろいろな点で影響が出ている。そこで、本学短大における和裁指導上の手がかりとするために、入学時において学生の和裁学習に関する諸調査を行い、今後、限られた時間内における学習効果をあげるための資料とする考えである。

II 調査方法

調査の対象は表1のように本学の学生和裁履修者の昭和46年度から昭和50年度までの5年間にわたる合計245名と昭和46年度から10年間隔たった昭和56年から昭和60年度までの5年間の合計240名である。(以下昭和46年～50年のグループをI回、昭和56～60年度のグループをII回と称することにする。)

調査内容は記入方法による和服着用及び和裁学習の状況、きものの各部名称などに関する事

表1 年度別被験者数

I回		II回	
年 度	人 数	年 度	人 数
S 46	52	S 56	47
47	49	57	44
48	49	58	56
49	48	59	44
50	47	60	49
合 計	245	合 計	240

表2 出身地方別被験者数

地 方 別	学校別 回数別	公 立 高				私 立 高				全 体			
		I		II		I		II		I		II	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
東 京	京	73	49.0	59	32.4	88	91.8	42	72.4	161	65.8	101	42.1
東 関	東	57	38.3	99	54.3	4	4.2	14	24.2	61	24.9	113	47.0
東 信	北	7	4.7	9	4.9	0	0	0	0	7	2.9	9	3.8
九 東	越	3	2.0	6	3.3	1	1.0	0	0	4	1.6	6	2.5
中 海	州	3	2.0	4	2.2	0	0	0	0	3	1.2	4	1.7
北 道	海	2	1.3	2	1.1	1	1.0	1	1.7	3	1.2	3	1.3
北 陸	国	2	1.3	1	0.6	1	1.0	1	1.7	3	1.2	2	0.8
	道	1	0.7	0	0	1	1.0	0	0	2	0.8	0	0
	国	1	0.7	1	0.6	0	0	0	0	1	0.4	1	0.4
	陸	0	0	1	0.6	0	0	0	0	0	0	1	0.4
合 計		149	100.0	182	100.0	96	100.0	58	100.0	245	100.0	240	100.0

(注) 郵便番号簿の区分による

項、実技方法による運針及び主な基礎技術についてである。次に「女物ゆかた」完成時の指導者の評価結果との関係を考察した。

調査時期は毎年4月下旬に記入法と実技に関するものを行ない、「女物ゆかた」の評価はゆかた完成後である。

被験者を出身地方校別にまとめると表2のようである。

全体でみるとI回では東京が65.8%と最も多く、ついで東京を除く関東の24.9%で関東が90.7%を占めている。II回では東京42.1%、東京を除く関東が47.0%で差はほとんどなくなっているが、I、II回とも関東地方で占め、他の地方出身者は少ない。

公立校では、I回は東京49.0%、東京を除く関東38.3%であるが、II回は東京32.4%、東京を除く関東54.3%で10年間で東京より近県の学生が多くなっている。

私立校では、I回は東京91.8%、東京を除く関東4.2%と東京で占めていたが、II回では東京72.4%、東京を除く関東24.2%で東京は減少しているが東京の比率はまだ高い。

公立校と私立校では10年間で私立校が減少し公立校が増加している。なお、公立校の場合は中・高校ともに公立校で男女共学であり、私立校の場合もやはり、中・高校ともに私立校で女子のみである。

Ⅲ 結果及び考察

1 和服着用状況

洋服が主である今日、短大入学時までの和服着用状況についてみると表3のようである。Ⅰ回は245人中2人、Ⅱ回は240人中3人が着用していないが、それぞれ99%が着用している。

表3 和服着用の有無

回数別 着用の有無	Ⅰ		Ⅱ	
	人数	比率	人数	比率
有	243	99.2%	237	98.8%
無	2	0.8	3	1.2
合計	245	100.0	240	100.0

2 和服着用の機会

和服着用の機会は表4のようである。Ⅰ回では、正月65.4%、盆・祭り44.9%、七・五・三41.6%、Ⅱ回では七・五・三71.7%、盆・祭り58.6%、正月49.4%の順で10年後のⅡ回には着用の多い順位が逆になっている。七・五・三に多いのは子供の頃に着用した印象が残っているからであろうか。いずれにしても年中行事に着用するものが多い。しかし、外出・訪問にⅡ回では着用されていないのは、簡便さを求める現代の風潮であろうか。

表4 和服着用の機会

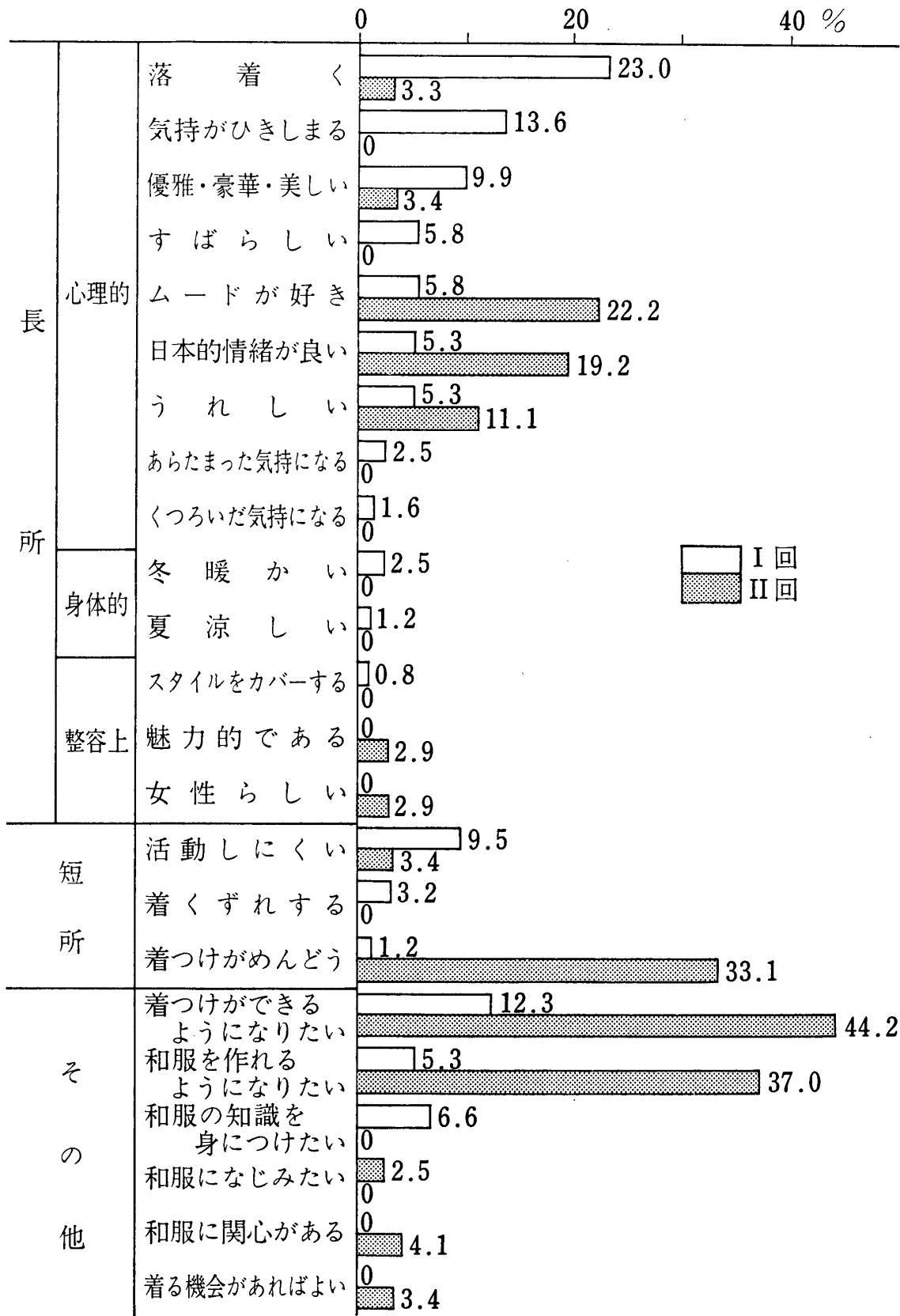
回数別 着用の機会	Ⅰ		Ⅱ	
	人数	比率	人数	比率
正月	159	65.4%	117	49.4%
盆・祭り	109	44.9	139	58.6
七・五・三	101	41.6	170	71.7
結婚式・パーティー	30	12.3	8	3.4
けいごと	18	7.4	8	3.4
外出・訪問	11	4.5	0	0
合計	428	176.1	442	186.5

(注) 複数回答による

3 和服着用の感想

和服着用の感想についてみると図1のようである。

長所として心理的、身体的、整容上のもの合せて、Ⅰ回では12項目あげられ、そのうち落ち着く



(注) 複数回答による

図1 和服着用の感想

23.0%，気持がひきしまる13.6%，優雅・豪華・美しい9.9%の順であり，Ⅱ回では7項目あげられ，ムードが好き22.2%，日本の情緒が良い19.2%，うれしい11.1%の順で，いずれも心理的なものが多く，身体的に感ずるものはなくなり，その時代感覚にふさわしい表現となってくる。

短所的なものとしては3項目あげられ，Ⅰ回では活動しにくいと9.5%と1位であったが，Ⅱ回では着つけがめんどろ33.1%と最も多くここでも簡便さを求める傾向がみられる。その他として希望的なものが6項目で，着つけができるようになりたいⅡ回44.2%，和服が作れるようになりたい37.0%とⅠ回より非常に多くなっている。これらの点からも和服は着つけが問題である。また，Ⅰ回に比べて10年後のⅡ回の学生が，着られるようになりたい，作れるようになりたいが増えたのは一つのアコがれであろうか，著者には思いがけない現象である。

4 中・高校における和裁学習状況

中・高校における学習状況は表5のようである。

表5 中・高校における和裁学習の有無

学校別 回数別 学習の有無	公 立		私 立		全 体	
	I	II	I	II	I	II
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
有	59人 (39.6)	7 (3.8)	71 (74.0)	45 (77.6)	130 (53.1)	52 (21.7)
無	90 (60.4)	175 (96.2)	25 (26.0)	13 (22.4)	115 (46.9)	188 (78.3)
合 計	149 (100.0)	182 (100.0)	96 (100.0)	58 (100.0)	245 (100.0)	240 (100.0)

全体で見ると中・高校において和裁を学習した人はⅠ回53.1%，Ⅱ回21.7%で，学習しない人がⅠ回46.9%，Ⅱ回78.3%で学習しない人が31.4%増加している。

公立校では学習した人がⅠ回39.6%，Ⅱ回3.8%で，学習しない人がⅠ回60.4%，Ⅱ回96.2%で10年後には学習しない人が35.8%増加している。

私立校では学習した人がⅠ回74.0%，Ⅱ回77.6%，学習しない人Ⅰ回26.0%，Ⅱ回22.4%でⅠ回とⅡ回との差は3.6%で余り差はみられなかった。

公立校においてⅡ回では学習しない人が96.2%とほとんど学習されておらず，私立校の方が近年でも和裁の学習をしていることがわかる（学習人数の差は検定の結果危険率5%で有意であった）。公立校は男女共学であり，大学受験に重きがおかれているためか「被服」の教科を履習するものがないようである。

5 和裁学習の内容

和裁学習者の学習内容についてみると表6のようである。

表6 和裁学習者の学習内容

内 容		学 校 別		私 立		全 体	
		回 数 別		I	II	I	II
中 学 校	運 針 少 々	13.6	0	7.0	0	10.0	0
	ゆ か た (女)	40.7	0	71.8	0	57.7	0
	四 つ 身	0	0	1.4	0	0.8	0
	肌 じ ゆ ば ん	3.4	0	2.8	0	3.1	0
	袖 の 部 分 縫 い	8.5	0	0	0	3.8	0
	縮 尺 に よ る 裁 ち 方	11.9	0	0	0	5.4	0
	ゆ か た の た た み 方	1.7	0	0	0	0.8	0
	き も の の 各 部 名 称 教 科 書 を 読 む 程 度	1.7	0	1.4	0	1.5	0
高 校	ゆ か た (女)	20.3	100	15.5	100	17.7	100
	〃 (男)	0	0	7.0	0	3.8	0
	ウ ール の き も の (女)	1.7	0	59.2	0	33.1	0
	ウ ール の ア ン サ ン プ ル (女)	0	0	0	37.8	0	32.7
	き も の の 各 部 名 称	1.7	0	0	0	0.8	0

(注) 複数回答による

中学校の学習内容をみると、I回では9項目あげられているが主に「女物ゆかた」である。また、公立校では「女物ゆかた」40.7%で、他は簡略な学習で済まされているが、私立校では「女物ゆかた」71.8%と多く学習されている。しかし10年後のII回においてはカリキュラムの変更か、中学では公・私立校とも和裁については学習されていない。

高校の場合、I回では全体的にウールのきもの33.1%、ついで女物ゆかた17.7%、男物ゆかた3.8%の順で、公立校では主に女物ゆかた20.3%、私立校ではウールのきもの59.2%と最も多かった。II回の公立校では女物ゆかたのみであるが、私立校では、女物ゆかたの他にウールのアンサンブル、即ちきものと羽織まで発展し、内容的にも豊富で教育の一貫性がみられる。

6 きものの各部名称

きもの製作にあたって、構成されている各部の名称を理解させることが必要であるので、その正解答率についてみると図2のようである。

きものを構成している主な6項目の名称、即ち、袖、後身頃、前身頃、衽、衿、掛け衿についてみると、袖と衿は殆んど知っているが、後身頃、前身頃については20~25%、衽、掛け衿では約15%台と少なくなっている。

ゆき以下16項目あげた名称のうち、洋服に関連ある名称の袖口、袖つけ、後幅、脇などは、I

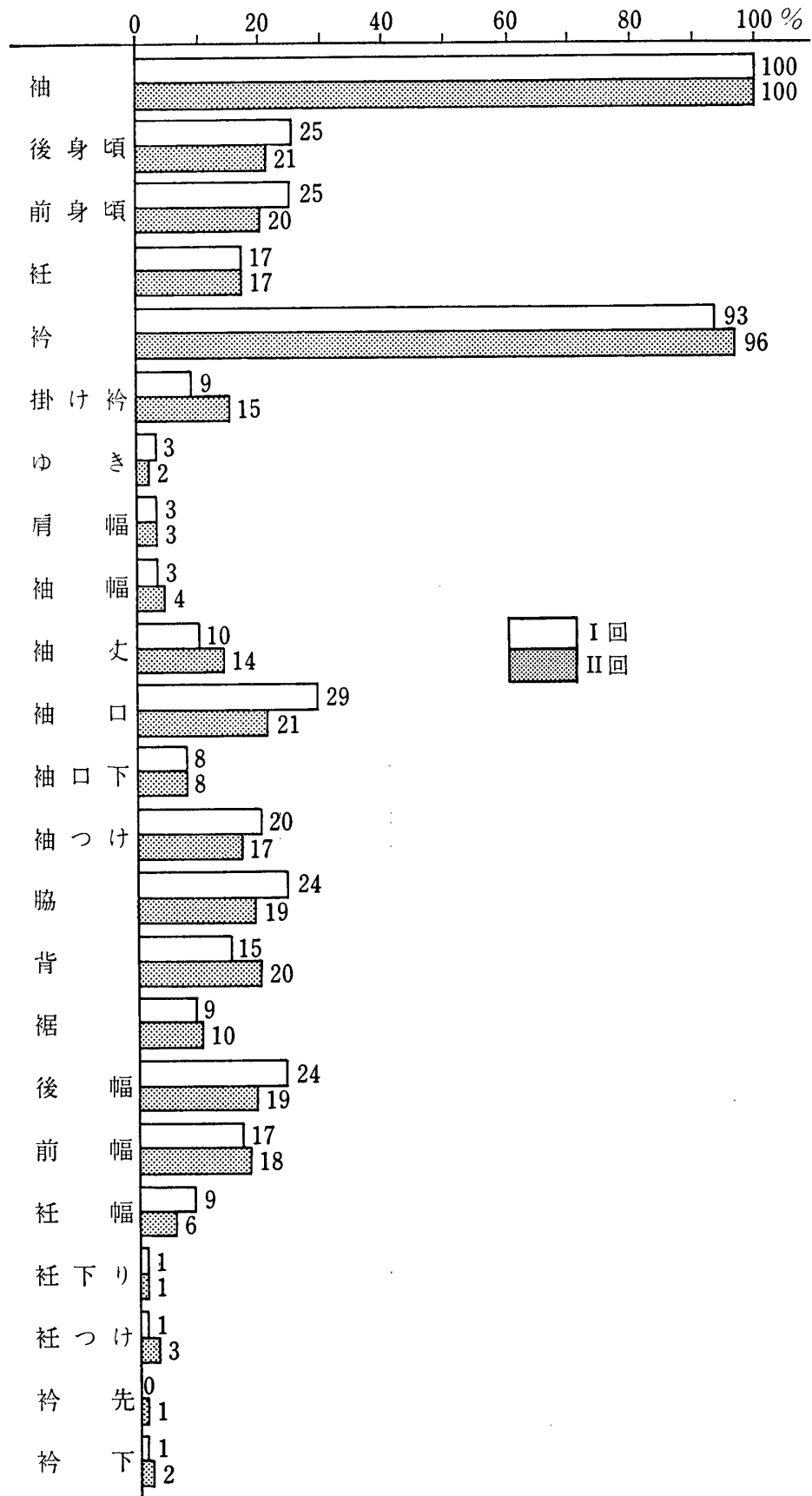


図2 きものの各部名称の正解答率

回では20～29%、Ⅱ回では約20%ほど理解されており、Ⅰ回の方がやや高い。きもの特有の衽下り、衽つけ、以下合襷幅などはほとんど全員わからなかった。Ⅰ回とⅡ回を比較した場合、Ⅰ回の方がやや理解度が高いのは、中学でも何らかの形で学習してきたからではなからうかと考えられる。

7 運針について

和裁においては、縫うことの基本技術である運針の上手、下手が仕事の能率や出来ばえに大きな影響を与えるので、和裁学習経験者の運針についてみると表7のようである。

表7 和裁学習経験者の運針について
(1) 運針の程度 (実習による判定)
(単位 %)

回数別 運針の程度	I	II
よくできる	2.3	9.6
普通にできる	6.9	32.7
よくできない	90.8	57.7
合計	100.0	100.0

(2) 運針練習経験の有無
(単位 %)

回数別 経験の有無	I	II
有	78.5	90.4
無	21.5	9.6
合計	100.0	100.0

(3) 運針のよくできない理由
(単位 %)

回数別 理由	I	II
習ったが練習しなかった	52.6	56.6
習わなかった	23.7	16.7
運針する必要はなく自由に縫えばよい	23.7	26.7
合計	100.0	100.0

運針の程度の基準は次のように決めた。

① よくできる……正式である。

針のめどが指貫にあたり、針の持ち方が正しく、正しく縫うことができ、糸こきもできる。

② 普通にできる……正式によらなくとも縫うことができる。

③ よくできない

指貫に針のめどがあたらないで親指と人さし指とで縫い、且つ、速度が遅い。

和裁学習経験者の運針の程度についてみると、表7—(1)のようであり、I回ではよくできる人2.3%、普通にできる人6.9%、よくできない人90.8%とできない人が非常に多い。II回ではよくできる人9.6%、普通にできる人32.7%、よくできない人57.7%で、II回の方がI回よりよくできる人が4倍、普通にできる人が4.7倍に増えていることは、私立校で確実に習得してきたものと考えられる。

次に和裁学習経験者の運針練習経験の有無についてみると表7—(2)のようであり、経験のある人はI回では78.5%、II回では90.4%とII回の方が11.9%も高い。その高い理由は表5・6でみるように学習経験者の多くは私学出身者であり、私学の徹底した指導によるものと考えられる。

和裁学習経験者の運針のよくできない理由を問うてみると、表7—(3)のようであり、運針を習ったが練習をしなかったのでよくできないとする人がI回52.6%、II回56.6%と意外に多い。また、運針する必要はなく、自由に縫えばよいとする人がI回23.7%、II回26.7%いるが、これは能率やできばえに大きく影響するので、運針を習得する必要性が認められる。

8 主な基礎技術

きものの構成上「ひとえ長着」が基本であるので、その主な縫い方、くけ方、止め方、つぎ方、きせのかけ方などについてみると図3のようである。

学生の記憶には学習をしたように残っているものの実際に実習を行なってみると、縫い方の「並縫い」は一応全員できたが、「半返し縫い」は約10%で他の縫い方についての習得率は非常に低い。

くけ方の「三折りぐけ」、「耳ぐけ」は5%前後の習得率であり、「三折ぐけ」は洋裁の「まつりぐけ」と間違えるものが多かった。

糸の止め方の始めの「玉止め」と終りの「打ち止め」については、I回の場合は90%と50%で、II回の場合はいずれも21%でI回の方が習得率が高い。これは、やはり中・高校の両校での学習の徹底度の差によるものであろうか。総体的にみて基礎技術の必要最少限のものも習得されていない状態であり、短大における指導が重要となる。

9 和裁学習経験の有無と評価との関係

毎年4月から「女物ゆかた」の実習を行い、完成した時点で評価をおこなった。それについてみると図4のような結果となった。

評価の基準は下記のような4段階とした。

60～69点 少々間違いがあるもの。

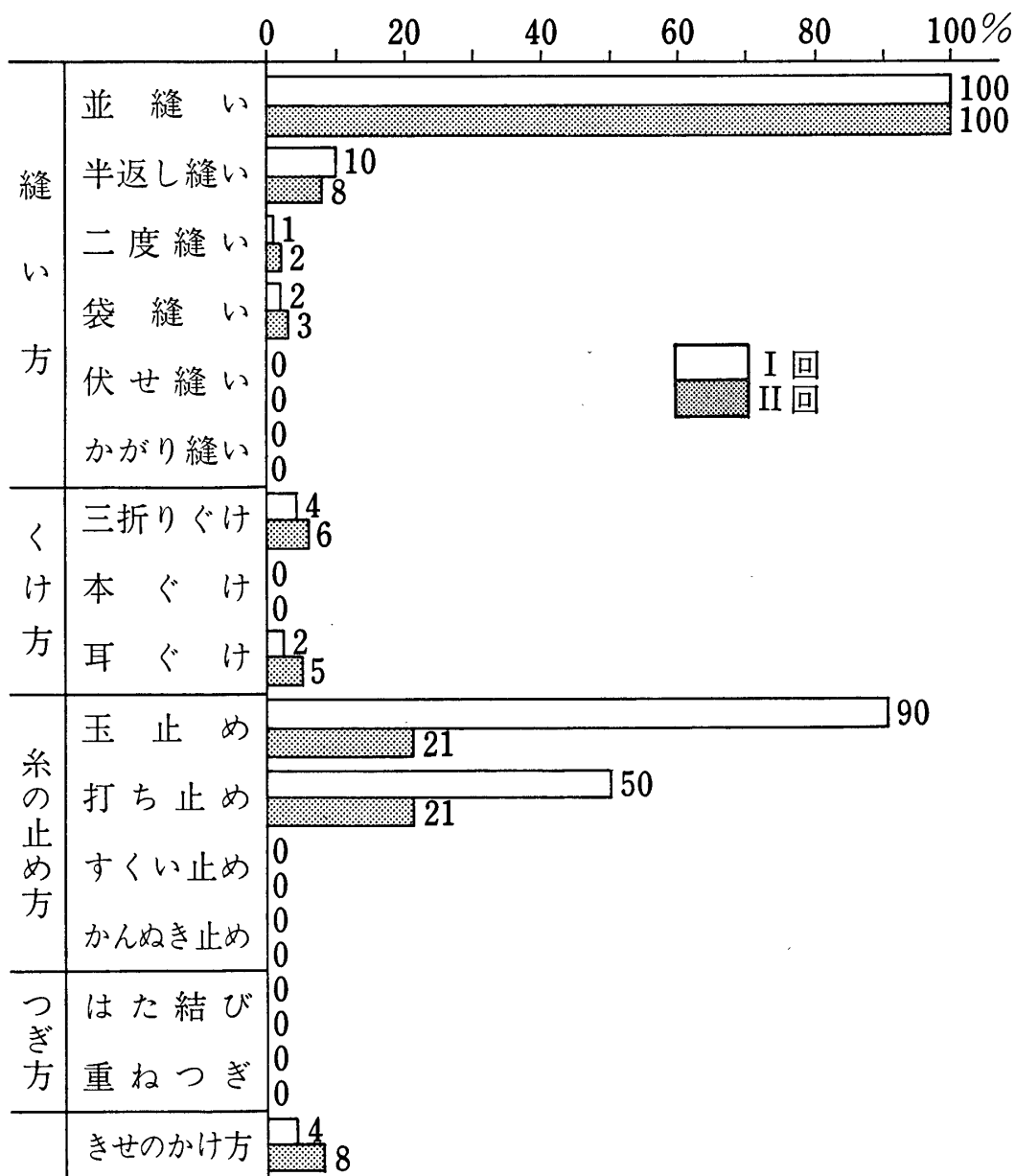


図3 主な基礎技術 (全員)

70～79点 間違いなくできているもの。

80～89点 " よくできているもの。

90～100点 " 非常によくできているもの。

学習経験のある人はI回の場合には60～69点2%、70～79点38%、80～89点56%、90点以上が4%で、II回の場合には80～89点27%、90点以上が73%と非常によい成果をあげているが、これは高校で「女物ゆかた」と「ウールのアンサンブル」まで経験してきた人達である。また、学習経験を持ちながら、60～69点がわずかではあるが、これは、学生本人に質問したところ、中・高校で実習は行なわず、教科書を読んだり、きもの名称などを学ぶことすまされた人達であ

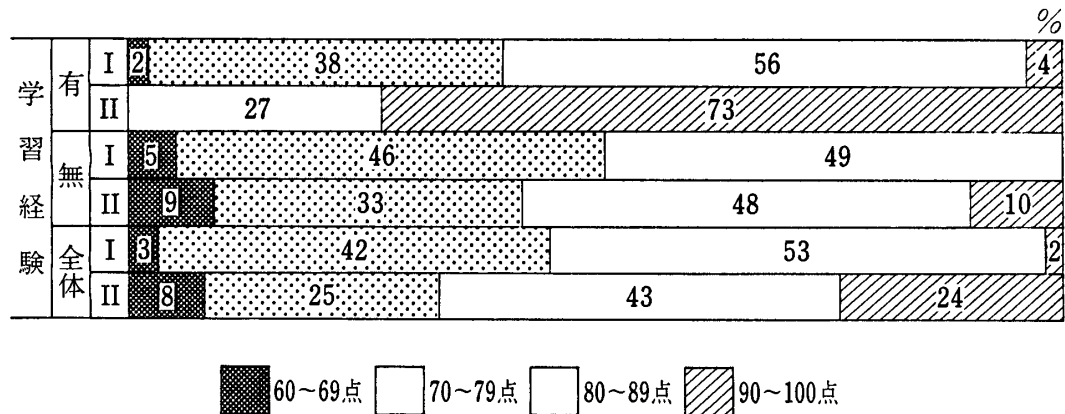


図4 和裁経験の有無と実習後の評価との関係

る。

次に学習経験のない人は、I 回の場合 90 点以上がいなかったり、I、II 回に 60~69 点が 5~9% もいるのは、家政系は好きではないが入試の関係で入学してしまった人達のようなのである。しかし、II 回の場合のように 90 点以上の人が 10% いるのは、はじめて学習した和裁に意欲をもって努力したことによるものと考えられる。

全体的に近年和服になじんでいないために、技術的な面も低下し指導は大変であるにもかかわらず、評価が I 回より II 回の方がすぐれているのは、学生が就職のためなどにより点をとりとうと努力する傾向がみられるからであろうか。

以上の点から将来各人の意欲により、どのように変化するかは未知であるが、現時点では経験者の方が理解力もあり、すぐれていることが認められたので、今後在学中にできるだけ経験をつむことが必要であろう。

IV まとめ

以上の結果をまとめると次のようなことが言える。

1) 学生における和服着用の経験は 99% であり、その機会は I 回（昭和 46~50 年代）では正月、盆・祭り、七・五・三の順位であったものが、II 回（昭和 56~60 年代）では七・五・三、盆・祭り、正月の順と反対になっているが、いずれも年中行事のお祝や、レジャー的な祭りなどに着用する傾向がある。

2) 和服着用の感想から、II 回では「着つけめんどう」というのが 33.1% もありながら、「和服が着られるようになりたい」44.2%、「和服を作れるようになりたい」が 37.0% と増加しているのは、和服離れした今日でも日本の民族衣裳としての認識や新しい着物への関心が深まった結果と考えられる。そこで、今後は易しい着装の対策を考える必要がある。

3) 和裁学習経験者の学習内容は公立校の場合 I 回の中学では「女物ゆかた」が 40.7% で、その他は実物製作ではなく、縮尺による裁ち方、部分縫いなどであり、高校では主に「女物ゆか

た」を学習している。私立校の場合は中学では「女物ゆかた」が71.8％、高校では「ウールのきもの」を59.2％の人が学習している。Ⅱ回では、公・私立校とも中学校では学習経験ゼロであるが、高校では「女物ゆかた」を学習し、私立校では、その他に「ウールアンサンブル」などを学習しており、徹底した指導がなされていることがわかる。

4) 和裁の基礎となる、きもの名称、運針、各種縫い方、くけ方などについてみると、殆んど身につけておらず、短大においては「針の持ち方」「指貫のはめ方」などの初歩的な指導の必要性が認められた。また、家庭科の教師をめざす人、教員養成の立場にある人は学問と同時に技術面の指導にも力を入れる必要があるだろう。

5) 和裁学習経験の有無が被服構成の評価にも現われ、和裁学習経験者の方が理解力があり、実技面でもすぐれているので、本人の資質もさることながら経験をつむことの必要性が認められた。

以上を総合的にみると、和裁学習経験者の方が当面は理解力、実技面ですぐれており、経験をつむことの必要性がわかった。そのためには先ず「縫う」という手指技術の上達であり、従来の運針練習を効率よく行ない、縫うことと同時に基本的な和裁に関する知識・技術を習得すれば、あとは各人の意欲によって応用発展し、限られた時間内に効果をあげることも可能と考えられる。

指導者としては限られた学習時間内に、経験をつむと同じ学習効果をあげ得るような教授法を研究しなければならないことを痛感した。

参考文献

- 1) 熊田，森田，古松，永井；和服一平面構成の基礎と実際（衣生活研究会）昭和62年
- 2) 大橋登史子；中国短期大学紀要第18号「高等学校家庭科における学習効果に関する一考察」昭和62年
- 3) 本間小枝子；跡見学園短期紀要第23集「婦人用ゆかたに関する考察」昭和62年